巻 頭 言

わが北星学園大学は昨秋開学30周年記念式典・祝賀会を催したのであるが、この『北星論集』もその記念号として発刊することになった。号数としては第29号である。顧れば29年前、その第1号を出した時には、掲載論文は僅かに9篇、英文関係3・社会福祉関係3・一般教育関係3という構成であった。それが20周年記念号を出して後、間もなく第21号から文学部・経済学部2分冊となり、分量的にも例えば第27号においては文学部9篇、278頁・経済学部11篇、337頁の大冊となっている。今回の30周年記念号においても、現在掲載予定のものとして、文学部18篇、経済学部13篇が数えられており、20周年記念号(第19号)の単冊25篇に比べても進展の跡は著しい。これは単に数だけのことではなく、当然のことながら取扱われる題材、その領域の拡大等のことも含めてのことである。その背後には大学自体の拡充発展(新学科・コースの開設)ということがあり、それに伴う新しい研究者の登場、また相次ぐ国内外研修の成果としての研究内容の深化とその質的向上等々のことがあるはずである。

それぞれに専門分野を異にしてはいても、おのがじし「見えざる建物」としての総合的学問体系を想定し、それを目ざしてこつこつと一里塚を建てながら忍耐強い歩みを進めているはずであるが、筆者自身第1号執筆当時の問題関心からは今は遠く離れているとはいうものの、現実の論文作成作業は怠りながらも脳裡には絶えず若き日の構想が点滅しており、大きく迂回しつつ何時の日かそこに回帰するであろうことを予感・予想しつつ現時点での関心事を「見えざる建物」の一画に位置づけようとの努力を怠らないよう心がけている。余談ながら近年刊行されたある事典の中で第1号掲載の拙論が参考文献として上げられていることに最近気づき、それをきっかけとして再び当時の初志(大学形成への志をも含めて)を想起し自から励まされていることは感謝である。

それぞれの領域には、言うまでもなくそれぞれの「ことば」がある。例えば文学的言語からコンピューター言語に至るまで。しかしその背後にひとつの基本的な「ことば」があり、そこからあらゆる種類のことば

が生み出され、その多くのことばが一つの「ことば」に支えられつつそれぞれの展開を遂げてゆく、この構造連関を想定するならば、今後もその展開過程は現時点での予想を遙かに超えて豊かに多様多彩なものとなり、その様態はまたとりも直さず教育課程の変容そのものと相応じてゆくはずである。肝心なのはその中心にある「ことば」を見失わないことであり、事柄を単に形式的輪廓においてのみとらえ、その中心（本質・真相）から目をそらすことのないよう日常的営為を怠らぬことであろう。およそ学問的営為はおしなべて極度に抽象的なものである。具象を具象として語ることは人知の出発点ではあるが其処に止っている限り文化の発展はない。大学は抽象能力を養う場である、とはその昔よく聞かされたものであって特記すべきことではない。しかし、その抽象化の極限においてある具体的現実的な一つの確かな事態に遭遇することのあることを勝れた先人たちはわれわれに告げている。それは日本文化の伝統に即して言えば一つの「悟り」ということになるのであろうが、われわれはまた少しく異った意味合いにおいてその消息を予想することが出来る。それは元来基本的な「ことば」に根拠を置いて構築されたはずのこの大学に身を置く者にとって、究極の課題として共有されるべきであろう。

1992年３月

北星学園大学

学長　山崎保興